
東方操魂道

サネキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方操魂道

【Nコード】

N1014Z

【作者名】

サネキ

【あらすじ】

目が覚めたら眼の前に人の顔があつた。そしたら、なかなかヤバイ能力を持っているとわかった。人でなくなつたと気づいた。泣いた。そんな化物が日本をあっちへふらふらこっちへふらふら。そんなで幻想郷でのんびり暮らす物語

真っ黒、誕生（前書き）

物書き初心者がやっちゃった作品

駄文ですがよろしくどうぞ

真っ黒、誕生

目の前に人の顔がある。絶望してるような、苦悶の表情だ。目を閉じる、開ける変わらない。もう一度閉じる。あれ？何だ、瞼の裏に、今、立っているのが俺だと認識するのに納得してしまう、あらゆる情報が映る。——あああ！頭が、割れそうだ。痛い、痛い、吐きそうになる。俺は、人間だろ！何だよ！これ！

はあ、はあ、落ち着けとりあえず整理しろ、頭の中をわかりやすく綺麗に……ああ、認めるしかないじゃないか俺は人間じゃない。そもそも手を見ればわかる人間のものじゃない。ぼやけて見えるのに真っ黒だ。人間じゃなくなった俺は一体何に、くそつままた流れてくる……そうアレだ昔読んだ、蟲。の核。蟲みたいな奴だ。もつともアレみたいに集合体じゃなく一体だけみたいだな。そうだ、アレは魂を喰うんだよな。あああ！何だ、また、痛い、違うこれは俺のじゃない、目の前の人間のおお！『ここから出せ。早く早く！早く！！頼む出してくれ！！』うるせえええ！

俺は走り出していた気持ち悪くて、辛くて、訳がわからなくて、どうしようもなく、ただ我武者羅に。踏み出すたびに草が、手を振ってあたった木が、踏みつぶした虫が、ぶつかった動物が、そいつら命を魂を勝手に吸っていく、俺が走ったばかりに、俺の中に入ってくる。

俺は何も無い岩山の頂上にいた。こいつは喰らわなければ弱っていく、そして、死ぬだろう。すまない、俺の中に入っているもの達、すまない、俺が死ぬまで待っていてくれ、そうしたら、きっと、解放される。待っていてくれ。

ああ、俺に次があるのか知らないがこんな記憶は絶対に持って行き

たくないな。

俺は目を覚ました、周りの風景は寝る前と大きく変わってた、岩が土が砂が多くなっている。

ああ、まだ俺はこれなのか『……きる！』うるさい、もう黙ってくれ、お願いだ。『今のお前ならできる、やってくれ！』……どういうことだ、わからない、俺にどうしろってんだ『頭の中で思い浮かぶはずだ、使い方が、能力が』——【魂を操る程度の能力】……ああ、これが、なるほど確かにこれならできる。

魂を操るか、周りの草木がなくなるほどに吸って力が増したからか、それとも俺が魂を喰らうのを拒否したから性質が変わったのか『さあ、早く。出してくれ、ここは何も無い。ただ、俺が、俺たちがいるって認識できるだけなんだ』わかってるよ、少し待ってくれ……よし、さあ、これでどうだ。

何百もの光が体から出ていく。……ああ、綺麗だ。俺はこんなにも綺麗なものを閉じ込めていたのか、すまない、本当にすまない。

すると、また声が聞こえてきた。あの怨念に満ちたような声でなく、優しく温かく包みこむような声だった。

『謝るのは私達の方だ。君のような子にそのままの感情をぶつけてしまった。君が私たちのことを知れるように私達もまた君のことを』

知れるのだよ。それで、長い時の中で少しずつ見せてもらった。あのような時代に生きていた者にとってこれは辛かっただろう。……ああ、すまない、もう時間だ。君とはもっと話したかった。急かしてしまった私達が言うのも何だがな。私達はこれで去る。君はもう大丈夫だろう、能力を使えば。それと私達が持っていた知識は自由に使ってくれ封印する必要はない。では、さらばだ』

光が消えて行く、いや、天に昇っていく。

俺は気がつくと涙を流していた。もう苦しむ必要はないからか、もう人間だった頃に帰れることはないとわかったからか、それとも分けのわからない状況で、中にいたもの達が自分達のほうが辛かったはずなのに優しい声をかけてくれたおかげか、俺は声をあげて泣いた。ただ、泣いた。

あれから、どれだけの時が経ったか、少なくとも、1万回以上は太陽が昇ったと思う。

俺がそんな長い時の中で最初にやったことは人間だった時の主な記憶を絶対に開かないように魂の奥底に封印することだった。名前とかどんな顔だったとかいろいろとな。もっとも知識として役に立つことは残しているけど。多分その時は人間だった頃と決別したかったんだと思う。でも、知識は残してるしなんか意気地ないな。疲れてる状態でやったからこれの記憶が曖昧なんだよ。操って思い出すことができるけどなんとなくしたくない。

次にやったことは、自分がどんな姿をしているかだ、幸いにも、少し移動してところに池があったんでそこで確認してみた。そして、真っ黒だった。本当に真っ黒でちびだった。ジ。リのコダマをイメージすると早いだろう、あれの黒だ。しかも目とかの穴がなかった。どうやって見てんだと思ったが、まあなんだ俺みたいな存在がいるんだし、何か不思議なパワーでも働いているんだろ。

それから、能力がどこまで出来るのかだった。最初は全然で、せいぜい、むやみに吸収しなくなっただくらいだった。

そこから十数年諦めずに頑張っていたら変わった。何がって、姿が変わるようになったのさ。成長したと言えるのかも知れないが身長を170cmあたりまで自由に伸ばすことができるようになった。もちろん縮めれる。あと、こっちのほうが重要で自分が今まで吸収した奴の姿に変わることができた。しかも、その状態で同種に会うと会話ができた。と言っても、馬鹿ばかりで知能は高くはなかった。中にいたもの達には本当に感謝してもしきれない。

それから、調子にのって周り一帯の頂点に立とうとした。その過程で、驚いたのは妖怪がいたことで、しかも日本語を話す奴がいたことだった。すぐにそいつとは友達になった。でも、すぐに他の妖怪にやられてしまった。思わず悲しくなり、やりやがった奴を吸収して中で取るもんだけ取って消滅させてやろうと思ったけど、やめた。ああ、そうだと吸収だけど、合意の上ならやった、もつとも情報をもらったらずに解放してあげたけど。

毎日が充実してた、妖怪や動物、関係なく楽しんだし、騒いだり、馬鹿もやった。時々、別れがあったけど、そのたびに乗り越えてきた。悲しくもあった。でもさ、そういう奴に限って吸収してくれて頼んできて、しかも、解放されるときに『魂は別れてしまうが、心はともにある』とか、そんなくさい台詞言って逝きやがってさ、

そんな言われたら嬉しくなつて涙が出そうになるじゃないか、実際には出てないみたいだが。まあ、いい奴らだったよ。本当に。

「どうした、やけに深く考えているではないか」

こいつは一番長い友達で妖怪だ。見た目はうり坊でかわいい。もっとも成熟した猪より倍はでかいんだけどな。それと口調が合っていない。

「いやなに、昔を思い出して、ちょっとな。………そういえばお前との出会いはなかなか面白かったな、俺をふっ飛ばしやがって」

「あれはお主が悪い」

「何、あれはお前が悪いだろ、前をよく見て走らないからだ」

「いや、何を言うか。お主はあの時、今みたいに大きな姿をとつておらなんだし、なによりその色で日陰にいたではないか。それでぶつかるなど言うとは、それはなかなか難しいことだぞ」

「ぬ、そうだったか？悪い、ぶつかったことしか覚えていないな、ちょっと待て、今探す」

「……お主の能力はこういう時便利であるな」

「お、あつた……あー確かに日陰で小さくなってぼうつとしてら。で、そのあと、俺が切れて何すんだ猪が……あれ、うり坊じゃんつて言っただんな」

「あの時は自分だけ模様がなくならなくて、イライラしておったかな。あの時は若く血気盛んであった」

「そんで俺がお前をさらに馬鹿にして喧嘩になっただんな。懐かしいもんだ」

「ああ、懐かしいとも、楽しかったとも……それで、お主いつ山を出て行くつもりだ」

ああ、やはり、気づいていたか。図体でかいくせに妙に察しがいいからな。

「いや、別に理由は言わんで良いぞ。どうせ飽きたとかであろう。しかしな吾とお主たとえば離れようとも心はともにあると信じておるからな、暇になっただらいつでも、戻って来い。吾はこの山の主であるからな、死ぬまでずっとおるわい」

「——っ！この馬鹿、俺がその言葉に弱いつてわかって言っているだろ」

「ふははは、本当に弱いのだな表情が分からずとも感情が伝わってくるわい」

「まったく、この馬鹿が……お前の魂は絶対吸収するからな、勝手に死ぬなよ」

「おうおう勝手なことを言いおる、なら勝手に死なんように気を付
けんとな……行ってこい吾の友よ」

「……おう、行ってくるぜ。友達」

ふん、この馬鹿野郎。だからずっと一緒にいる奴は苦手なんだ。ど
いつもこいつも人の感情がわかりやがる。顔ないはずなのに。

……ありがとうなんて絶対に言ってやらん！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1014z/>

東方操魂道

2011年12月3日21時56分発行